

いるか訳のわからぬ私に用務を命じられるのに、いちいち自分の名刺の裏に要件を書いておかれるといったことがあつて、これが何よりも恐縮の種であり、お叱りを受けるべき事許りで申訳ない次第でした。こんなちよつとした事にも先生の人が惚ばれ、世俗的な人間関係よりも研究一筋に打込まれた態度に感服します。助手の私の方がノサ張つている様な感じではなかつたかと今になつて恥かしく思い起します。

先生には学校でよりもお宅でお目にかかつた方が多いくらいでした。学生時分には同級の者は三・四名ですから講義はほとんどお宅でして戴きましたし、奥様の心づくしの色々戴き乍ら色々ととりとめもないお話をした事も多い出多いものがあります。大阪の境跡で作つた野菜を喜んで貰つて戴けたのも何よりも嬉しく思つています。学問上の御恩はもとよりとして、こんなに色々な面で気安くお導き下さつた先生に長くお会いしないでいるうちに突然のお知らせで全く驚きました。

青年時代を立命館大学で過した私も、中年と言われる年になつてその頃のことをしみに

みとなつかしく思い出しています。反省すべき事のみ多い嘗ての日々の思い出ではありませんが、後藤先生の温顔とその独特の歩かれ方は今も目の前にありありと浮んで来ます。そして最近もつとしばしばお訪ねしてお教を受けておけば良かったと後悔の思いで一杯です。(昭和二十三年三月卒、大阪府立泉尾高等学校教諭)

### 後藤博士の御逝去を悼む

石 古 繁 信

後藤博士が突然、御逝去せられたことを、心より哀悼の意を表します。

博士の御指導を受けたのは、昭和二十四年から三十二年までの八年間である。学部二年間と大学院六年間である。

博士は温厚篤実なお人柄で、国文学の道ひとすじに生きてこられた方である。それは、数多くの論文は勿論のこと、博士の講義を一度でも受けた人は、誰でも感じることである。昭和二十七年、大学院文学研究科に日本文学専攻が設けられた時、私は第一に志望したのである。その頃、私は大阪府布施市の定

時制高校の国語教師として勤務していた。大学院の講義を受けるために、布施と京都の間を往復四時間のところを、ほとんど休まずに通い続けたのも、ひとつに博士のお人柄と、そこからにじみでる学問の深さにひかれるところがあつたからである。

私は近世文学——馬琴の読本の研究へと進んでいつたのも、博士の学問に啓発されたからである。大学院で講義せられたのは、「太平記」「平家物語」であつた。例の特徴のあるきちんとした文字をていねいに書いて、時間通り講義を下さつたものである。

博士の学位を受けられた前後は、「読本の研究」に没頭していられたように拝察している。晩年はやはり上田秋成、典亭馬琴の読本にあつたようである。岩波書店から刊行された「椿説弓張月」(「日本古典文学大系」60昭和33年8月刊)は、お忙しい講義の傍、執筆していられたのである。私はわが身の浅学非才をかえりみず馬琴の大作、「南総里見八犬伝」の素材と構成という研究題目をきめたのもそのためである。それ以来六年間、教育事務のかたわら、年表の作成に、論文の構想にたびたび先生の御住居をおたずねしたものを

である。

博士は学問のことになると、いつも御氣難よく話して下さるので、学生にはとても有り難い存在であつた。まづたく学究的な超俗的なお人柄であつたのである。

私が昭和三十三年に修士課程を終了することになつたのも、博士の御指導があつたればこそである。しかしながら、教習事務に明け暮れして、その後ひさしくおたずねする機会を得なかつたが、突然、御逝去せられたことを知り、悲しみの念に耐えず、学界の支柱を失つたような寂しい気持ちでいつばいである。平常はあまり病氣などなさらなかつたのにと思ひ、これが運命とでもいうのであろうか、まづたくわからないような気持ちがある。

幽明ところを界にして、ふたたび、温顔を拝することができなくなつた今日、ひたすらその学恩を偲び、謹んで哀悼の意を表しますとともに、御冥福を心からお祈り申し上げます次第です。昭和三十七年七月十一日（昭和二十六年三月卒、大阪府立寝屋川高等学校教諭）

## 不肖の弟子

大橋 清 秀

親戚の結婚のことで旅先にいた間に、後藤丹治先生は急逝された。帰宅してはじめて先生の計を知つたわたくしは、御葬儀のお手伝いも出来なかつた。旅をしていたことが悔まれた。

わたくしが卒業論文和泉式部日記研究（校本篇・研究篇・附篇）を書くために資料をあつめていた頃、図書館のうす暗い書庫の中で先生におめにかかつたことがあつた。書庫の片すみで調べものをしておられた。その時の先生のお姿がわたくしの脳裏にやきついてゐる。

そしてその時、先生のお世話で、群書類従所収和泉式部日記の板本を借覧することが出来た。昭和二十二年十月のことであつた。まだ物の不自由な時だったので、水に強い洋紙をさがして来て、必要な大きさに切り、知人に依頼して青写真の葉をぬつて貰ひ、子供のころに遊んだ日光写真のように太陽光線で焼

きつけては、たらいの中の水で洗い、かけほしをするというまことに原始的な方法で複製をつくつたのであつた。今、その青写真の複製本をみてみると、末尾に、「後藤丹治先生の御厚意により立命館大学図書館本を借りてうつつ」と墨書してあつた。このほかに、たしか先生の御蔵書の扶桑拾葉集も借りしたとおぼえてゐる。

わたくしがはじめて先生の教えを受けたのは、昭和十八年の春のことであつた。

後藤丹治先生は、わたくしにとつてやさしいけれどこわい先生であつた。先生とのお話は、学問についてのことばかりで、いわゆる雑談のたぐいは本当に稀であつた。勉強していなければ、先生とのお話がとぎれてしまうように思われた。いつでも温顔で、懇切に質問に答えて下さつたが、先生御自身の学問に對するきびしさが、いやというほど伝わつて来るのであつた。わたくしはいつになつたら、先生と楽にお話が出来るといふ自分になれるのだろうかと思つて心細かつた。

先生の学問の偉大は、先生から離れると一層はつきりとわかつて来るのである。